

明智光秀

正統を護つた武將

井尻千田

明智光秀

正統を護った武将

ARFCHI MITSUhide
Ijiri Kazuo
井尻千男

[著者紹介]

井尻千男 (いじり かずお)

昭和13年(1938)山梨県生まれ。立教大学卒業、日本経済新聞社入社(1962)。コラムニストとして活躍するかたわら社会評論を数多く執筆して注目される。平成9年(1997)春、同社を退社し、拓殖大学日本文化研究所長に就任。「昭和精神史」と「都市社会学」を講じて平成22年(2010)春、同大学を退職。現在、同研究所顧問。

〈代表的著作〉

『消費文化の幻想』(PHP文庫)

『劇的な精神・福田恆存』(徳間文庫)

『自画像としての都市』(東洋経済新報社)

『共同体を保守再生せよ』(秀明出版会)

『日本あやうし』(新潮社)

『保守を忘れた自民政治』(ワック)

『日本再生』(グラフ社)

『男たちの数寄の魂』(清流出版)

明智光秀 正統を護った武将

二〇一〇年六月二日 第一刷発行

著者 井尻千男
いじり かずお

発行者 下村のぶ子

発行所 株式会社 海竜社

東京都中央区築地二の十一の二十六 〒一〇四—〇〇四五

電話 (〇三) 三五四二—九六七 (代表)

FAX (〇三) 三五四二—五四八四

郵便振替口座 〇〇二〇—九—四四八八六

ホームページ <http://www.kairyusha.co.jp>

印刷・製本所 株式会社シナノ

落丁本・乱丁本はお取り替えします

© 2010, Kazuo Ijiri. Printed in Japan



明智光秀〔?～1582〕

(所蔵・写真協力：本徳寺)



織田信長 [1534~1582]

(所蔵：長興寺、写真協力：豊田市郷土資料館)

装幀——川上成夫
題字——高塚竹堂
装画——上杉本洛中洛外図屏風
（米沢市上杉博物館）

明智光秀

正統を護つた武将

まえがき

明智光秀といえは主君を討った謀叛人であり、本能寺の変といえは三日天下におわったクーデターと嘲笑ちやうしやうされる。そして、そのモチベーションは何かといえは怨恨えんこん説と野望説である。あの事件からすでに四百年以上が経っているというのに、光秀は依然として汚辱にまみれたままである。一方、本能寺の変で斃たおれた織田信長は比叡山を焼き払い、高野聖を大量殺戮りくしたにもかかわらず、中世的權威を否定して近世・近代を拓いた英雄とされている。ことによつたら日本史上初のニヒリストかもしれないというのに、合理主義者として称賛されている。

私はかねて二人の武将についての、この単純きわまりない構図に深い疑いをいだいていた。

西欧のある哲学者が政治的肅清について面白いことを言っている。ときはスターリンの独裁時代、なぜプーハーリンは肅清されたのかについての推論である。權力を欲しがる者には金

錢を与えればよく、色欲のつよい男には女を与えればよいのだが、ブハーリンはそのいずれにも関心を示さず、正義を欲した。独裁者にとってこれほど厄介なものはない。正義を独占してこそ独裁者たりうるからである。よってスターリンはブハーリンを肅清したのであると。

天正元年（一五七三）に室町幕府を倒し、朝倉義景と浅井長政を滅ぼした信長は独裁的権力を固めつつあった。正親町天皇おおぎまちに対する退位要求もそのころからはじまる。そして安土城と城下町の造営は遷都というにふさわしい大転換であり、天主閣に見られるシナ趣味は易姓革命を予感させるものだった。こういうときに権力の分配にも財力の分与にも関心を示さず、ひたすら正義と古典的美意識を求める武将がいたとしたらどうなるか。美的秩序と政治体制論は深いところでつながっているとせねばならない。

信長が光秀を肅清することだってありえただろうが、光秀のほうが一瞬早く行動を起こした。それが本能寺の変の本質的構造だろう。もしそれが逆だったら、わが国の国体が危機に瀕したことだろう。

本能寺の変について「三日天下」と嘯わう人が多いが、嘯うまえに考えねばならないことがある。本能寺の変をテロリズムとしてとらえるか、クーデターとしてとらえるかで評価が分かれる。テロリズムであれば「三日天下」で十分といわねばならず、政権奪取のクーデターだったとしたら嘯うにふさわしい出来事といわねばならない。どちらだったのか。私はテロ

リズムだと解釈すべきだと考えている。その理由は多々あるのだが、それは本文にゆずるとして、クーデターを企てたとしたら、それなりの政治工作が必要だろうが、それをした形跡がまったくない。細川藤孝・忠興父子に手紙を出しているが、それは信長を本能寺で倒したあとのことであり、テロへの参加ではなく、事後処理への期待というべきだろう。古典的教養人の光秀としては、藤孝が細川幕府をひらいて朝廷をお守りするようにと願っていたのではないか。ちなみにいうが、本能寺のテロ行為に参加したのは明智左馬助（秀満）、明智次右衛門、藤田伝五、斎藤内蔵助（利三）ら親族と側近と無名の兵たちである。

私はかねて昭和初期に起こった「五・一五事件」や「二・二六事件」のことを考えるにつけ、その祖型が「本能寺の変」にあると思えてならなかった。それらは権力奪取のためのクーデターではなく君側の奸を討つことにとどまっているという意味においてはテロリズムである。そしてそこに日本の政治と美意識との微妙にして精妙なる共鳴があると思えてならない。近代の政治学は美意識と完全に無縁のものになってしまったが、たとえば醍醐天皇の勅命によって撰せられた古今和歌集が洗練された高度の政治的意味合いを帯びていたように、天正年間の武將たちの間にも、正親町天皇を中心とする古典派的美意識による連帯感が成立していたのではないか。そういうことを想像しながら、本能寺に至る過程を考察したのが本書である。なお私が本書をメタフィジカル・ヒストリーというのは、美意識と国体観との関係など形而上学的領域を考察したいがためである。

初出は、拓殖大学日本文化研究所の機関誌『新日本学』に連載したもので、その際には現所長の遠藤浩一氏と展転社の藤本隆之氏にお手数をかけ、本づくりに際しては海竜社の古川絵里子さんとフリージャーナリストの桜井裕子さんにお世話になった。記して御礼にかえさせていただく。

平成二十二年五月吉日

井尻千男

明智光秀 正統を護った武将 目次

まえがき 2

●第一章

出逢い

信長の実像とは 14

光秀の古典派的美意識 17

天皇と武将の関係 22

『古今和歌集』仮名序 24

光秀の発句と天皇親政 28

●第二章

九重への恋闕

「天皇の天下知ろしめすこと」
すべらぎ あめのした 34

響き合う天皇親政と長閑なる時
のじか 36

冷静な『信長公記』 41

倭建命に思いを馳せて
やましたけるのみこと 46

天皇親政を胸に宿せば 50

◎第三章

座の文化

座における人間関係 58

義輝暗殺の報に接して 61

『太平記』を読む光秀 65

光秀と藤孝の出会い 67

統治の学としての歌学 72

◎第四章

鎮護国家の不在

和歌に込めた思い 80

比叡山焼き討ち 84

朝廷への挑戦的行為 89

信長とフロイス 92

高野聖の虐殺 95

●第五章

乱世の危機感

厄介事は光秀に 104

坂本城が文化人のサロンに 107

慈円と後鳥羽上皇 110

国体の危機に瀕して 114

いつ累るいが及ぶか……という恐怖 118

●第六章

蘭奢待事件らんじやたい

過分なる名香の所望 126

安土城天主閣への思い入れ 130

フロイス厚遇の意味 134

棟梁ではなく殿上人に 140

天皇親政の道絶えて 142

◎第七章

天皇讓位を迫る信長

深まる孤立感 148

天正元年の思想戦 150

独裁者の保守潰し 153

眞実は文献の彼方に 159

現実味帯びる百王説 164

◎第八章

天下分け目の年

朝廷支援の隠された意図 170

逆立ちした徳政令 173

国体をどうするのか 178

権力の正統性 182

天下布武の次は…… 185

●第九章

新都市造営

- 理想都市の幻想 192
- 都市造営に熱中する信長 195
- 「天主閣」に込められた意図 199
- 相容れぬ美学上の対立 204
- 信長にとっての「大航海時代」 208

●第十章

統治機関の不在

- 親王を京屋敷に囲う 214
- 前衛派と古典派の対立 217
- 座における政体論義 220
- 安土宗論の狙い 224
- 忍耐の緒が切れる時 231

●第十一章 相次ぐ名将の死

三武将の重さ 236

光秀の諸国遍歴伝説 239

天の橋立の茶会 245

婿むこから舅しゅうとへの太刀贈与の謎 249

死者の真実と生者の方便 253

●第十二章 本能寺への道

官位辞退の真意 258

再度の馬揃えという武嚇ものふ 261

武士の道 266

至誠、天聴に達するか 268

侍精神の最後の光芒こうぼう 272